内科画廊の現在

三上 豊

1960年代に数多く現れた貸画廊群の活動については、同時代的に美術雑誌で取り上げられてきた。活動もさることながら画廊そのものについても、ある程度は歴史的に語られている。日本の近現代美術史への視点の広がりもあるだろう。例えば内科画廊。文献的には西山輝夫によるスクラップブックの展覧会記録があり、自分がいつ見たかを雑誌の展覧会予告などのコピーとともに押さえている。一部は慶応のアートセンターに寄贈されているはずだ。また中島保子編の「内科画廊の記録」(1992年・98年・2002年と更新 個人蔵)は展評を追跡した記録である。『美術手帖』の特集をもとにした1985年の『現代美術辞典』(美術出版社)では、「内科画廊」として立項されているが、64年6月に閉廊とまちがった記述になっている。元の特集に関わった私にも責任の一端はある。時は経て、『日本近現代美術史事典』(2007年東京書籍)では、福住治夫が「画廊という展示空間」で、内科画廊をサトウ画廊、ときわ画廊、秋山画廊、田村画廊と並んでとりあげ、それらを「新進作家の登竜門として、また生新な美術動向の揺籃の磁場として、単なるレンタル・スペースを超えた大きな意味を果たしてきた」としている。同様な趣旨で、近現代を取り扱う包括的な書籍、『日本の20世紀芸術』(2014年平凡社)にも取り上げられている。このような位置付けの基盤にあるのが、2000年３月京都造形大学・京都芸術短期大学の芸術館(会場は同大学GALLERY RAKU)で開催された「内科画廊―'60年代の前衛」展とその図録である。そこに登場したのが、内科画廊の経営者で医者でもあった宮田國男の娘有香さんだ。彼女による展覧会のための調査は、福住さんが主宰していた『あいだ』誌上の記事「内科だった画廊だった」(2000年11月号から2003年11月号まで、不定期連載20回)に克明に辿ることができる。記事のサブタイトルに「ふたたび〈内科画廊―'60年代の前衛展〉開催まで」とある。「ふたたび」どころか繰り返し、何度も内科画廊というフィールドは耕すに足る現代美術の現場だ。

ハイレッド・センターや篠原有司男、ゼロ次元、九州派、観光芸術研究所、松澤宥、飯村隆彦、刀根康尚、小野洋子、清水晃ら、現代美術を語るうえで必ず登場する人々やグループ、運動体が内科画廊にはいる。それらを語るうえで必要とされているのが、記録写真だ。近年、美術シーンの記録として大辻清司、酒井啓之、羽永光利らの仕事が再評価されている。羽永には内科画廊を含む『羽永光利 一〇〇〇』(2017 1000BUNKO)がある。今回、平田実が撮影した写真のコンタクトを見る機会を得た。平田は60年代の美術シーンを撮影した写真家として知られ、文献としてすでに『超芸術』(2005 三五館)、『ゼロ次元 加藤好弘と六十年代』(2006 河出書房新社)などがある。平田の内科画廊関連の写真をみていると、画廊の白い空間に現れる作品や人は影のようにみえてくる。写真上では白から黒へのグラデーションの階梯であり、プリントへの焼き付けの段階で平田の視点でグラデーションはつくられ、この１枚として発表されていった。だがその１枚の前後にあるコンタクトにもうごめく影

の群れがあり、それもまたコーラ、プラトンがいう世界が生成されていく現場でもある。コンタクトは画廊というコーラを捉えていて興味がつきない。パーフォレーションを含むフレームの黒は洞窟を思わせる。そこに出現する影に向けて、シャッターを切る平田の指先に宿るコーラもまた内科画廊の時を示している。けっして画廊(空間)と作品(形)といった二項に分けられることではない。これまでもよく言われてきた、「実験室」としての貸画廊という場、中原佑介は内科画廊を「超前衛型画廊」と名付けたが、「実験」や「超」を保障してきたのは、二項に分けられない陰影のグラデーションともいえる。

内科画廊にあっては、2024年の谷川晃一をはじめ鬼籍に入られた関係者の方が多いようにみえる。画廊が閉廊されてから60年近く、時の重さを感じざるをえない。

宮田國男(左)、谷川晃一(右)
刀根康尚企画「『刀根賞』作品発表」にて(羽永光利撮影)